

合唱におけるピアノ伴奏活用に関する研究（1）

—大学生のピアノ伴奏に対する意識調査をもとに—

友清祐子・平野桃子*・高橋雅子

A study on the Use of Piano Accompaniment in chorus (1)

—A Study on Recognition of University Students Concerning about the Piano Accompaniment—

TOMOKIYO Yuko, HIRANO Momoko, TAKAHASHI Masako

(Received September 25, 2015)

はじめに

音楽の授業において、ピアノが大きな役割を果たしていることは改めて言うまでもない。通常の授業では、授業時数削減の影響もあり、斉唱や楽器によるアンサンブルにピアノ伴奏という組み合わせで演奏されることがほとんどであろう。ピアノは譜読みに使用される他、子どもたちは「ピアノの音程に声のピッチを合わせて (p.30)」演奏し、さらに子どもたちにとって「ピアノは単なる伴奏ではなく音楽作りの大切なパートナー (p.31)」となる (渡瀬, 2013)。では、合唱においてピアノはどのように活用されているのであろうか。たとえば、混声三部合唱という形はヨーロッパにはなく、「中学校という学校制度の中から生まれてきた一つの新しいスタイルであり、新しい可能性を日本が発掘した (p.12)」ことから、独自の役割を果たしてきたと言えるのではないだろうか (佐藤, 1992)。本稿は、合唱におけるピアノ伴奏の役割について論じた上で、意識調査をもとに大学生のピアノ伴奏に対する捉え方を明らかにし、楽曲の構造や練習方法、本番のステージ演奏経験による認識について言及していく。

1. ピアノ伴奏とは

ここでは、辞書による伴奏の語義を明らかにした上で、実際にはピアノ伴奏がどのような役割を果たしているのか言及していく。

1-1 伴奏の語義

辞書によると、伴奏は次のように記されている。なお、網かけは筆者による。

【表1 伴奏の語義】

辞書名	語義
広辞苑	①楽曲の主要声部・主要旋律を引き立たせるために付け加えられる声部。 ②声楽や器楽の主奏部に合わせて、他の楽器で補助的に演奏すること。
大辞泉	楽曲の主旋律や主声部を支え引き立てるために、他の楽器で補助的に演奏すること。

* 山口大学大学院教育学研究科音楽教育専修

音楽小辞典	演奏および主旋律を 従属 的に助ける部分。18世紀までは低音で和音をおぎなうに過ぎなかったが、今日では表現の一翼を担うものとなっている。ピアノや管弦楽のことが多い。
新訂合唱事典	伴奏（声楽における）とは〈歌に 従属 しながら、なお相対的独自性を保持して歌を支える楽器演奏〉である。
標準音楽辞典	旋律進行をになう主要声部以外の音で、主要声部に 従属 し、旋律の拍子や和声構造を明瞭にするすべての音をいう。

このように、伴奏は、「補助」や「従属」という意味を含む語義であることが明らかになった。

1-2 ピアノ伴奏とは

ここでは、実際にピアノ伴奏がどのような役割を果たしているのか言及していく。

前述の通り、辞書においては伴奏は「補助」や「従属」という語義であったが、これについて今井(2014)は「伴奏は『ソリストに従属するもの』という立場にはまったく相当しない(p.27)」と反論した上で、「伴奏は、パートナーとの協働 (collaboration) であり、互いの信頼関係を前提に協力し合い、尊重し合い、各々の音を融和させる『アンサンブル』ということができる (p.27)」としている。同様に伊豆 (1995) は、ピアノ伴奏の役割について「独奏の長所を引き出し、短所があればそのつど補い同一目標のもとに共同の芸術を創り上げること (p.115)」であると述べている。これらの見解は、伴奏とソリストのアンサンブルという作業について、「協働 (共同)」「協力」「尊重」「融和」「補完」であるとまとめられるだろう。したがって、これらを前提とした伴奏とソリストの立場は、「伴奏ピアニストと独奏家、あるいは独唱家の関係は、音楽をつくり上げていく上で、演奏家として対等な関係 (p.33)」であり (齋藤, 1998)、「一つの音楽を創造するために不可欠な存在であり、両者には協力者としての関係性が存在しなければならない (p.26)」のである (今井, 2014)。

2. 合唱におけるピアノ伴奏の役割

2-1 合唱におけるピアノ伴奏とは

合唱の伴奏と歌曲の伴奏とのもっとも異なる点について、合唱ピアニスト¹である三浦 (1983) は次の三つを挙げている。(p.514)

- ・指揮者が絶対権をもち、全員がそのもとに服従すること
- ・伴奏者は指揮棒を見てひかなければならないこと
- ・合唱の方が多人数であり、声のパートの音の絶対量が多いためピアノにも音量が相当要求されること

つまり、合唱におけるピアノ伴奏の特徴は、「指揮者の存在」と「音量が相当要求されること」にあると言えるだろう。この「指揮者の存在」について、作曲家の青島 (2015) は、「もっとも大きな特徴は、合唱には指揮者が居ることである。彼の示すテンポを守って弾かなければならない (pp.53-54)」と指摘している。また、「音量が相当要求されること」について、青島 (2015) は「共演する相手の人数や曲の規模の違いから来る (p.53)」と述べた上で、他の理由として、「トレーナーとしての役割」及び「オケ版の曲をピアノ伴奏で受け持つこと」と次のように指摘している。(p.53)

それともう一つ、合唱の場合は稽古の段階から付き合う、すなわちトレーナーとしての役割も果たすからだろう。つまり歌曲の場合は伴奏パートも繊細に書かれ、ピアノの左ペダル（弱音ペダル）も多用するのに対し、合唱は大人数と渡り合う音量が必要なのだ。

それに現在は頻度が減ったとは言うものの、本来はオーケストラで伴奏すべき「ハレルヤ」などをピアノ一台で受け持つことから理解されるだろう。また合唱団は基本的にアマチュアで、しかも新作が掛けられることが多いので、準備段階から指導する必要が出て来るのだ。

また上記の2点に加え、青島（2015）は「指揮者としての目」を養うことを提唱している。その理由は、「曲の構成、とくに和声については分析できる知識が必要だ。それによって自分の弾くパートの重要性、どの音を目立たせれば良いかが解り、合唱で不足している声部を補強することも咄嗟に出来るようになる（p.54）」からである。清水（2014）がピアノ伴奏者に求めている「時には合唱パートと、拮抗しながら音楽を作り上げる、『ピアノパート』としての独立した役割」を担い、現代の合唱音楽において「ピアノパートと合唱パートは、ともに新しい音を紡ぐ関係にある」ならば、青島が要求しているような力量が必要とされるだろう（p.106）。具体的な力量については、「合唱におけるピアノ伴奏の活用」において後述したい。

2-2 合唱におけるピアノ伴奏の役割

ここでは、合唱におけるピアノ伴奏の役割について、合唱曲の構成の側面から論じていく。丸山（1990）は、合唱におけるピアノ伴奏の役割について三つに分類している。（pp.35-45）

I 支之型

①和音の支えによるもの

小中学校の教材をはじめとする小品などに多く見られる伴奏型。もっとも一般的な形である。

②リズムに支えられるもの

リズムの瞬間性に乏しい声楽を、曲の持ち味としてのリズム性に対応させる伴奏。小学生や少年少女のための合唱曲のほとんどが、この様なリズムとの関わりの中で表現されている。

③旋律に支えられるもの

合唱の声部と伴奏のピアノの声部が、ほとんどの部分で同一進行しているもの。唱法の寄りどころは伴奏に示されたアーティキュレーションによって決定される。

④ア・カペラへの補助として

合唱パートとピアノパートはそれぞれ独立した演奏が可能であり、全く対等な立場で演奏するものである。

⑤デュナーミックへの助長として

楽器が持つリズム性と緊張感によって、合唱のデュナーミックを一層助長しようとするもの。

II リード型

ピアノによる前奏や間奏等において、情景を提示する等、曲の内面性への導入を意味するもので、決して音量的なリードをいうものではない。

III 共同型

「〇〇合唱とピアノのための組曲」や「合唱とピアノのための〇〇」等、合唱とピアノを対等の表現組み合わせとする演奏形態である。

この分類は曲の構成によるものであると述べたが、曲の構成を超えてその役割を認識しつつ、

演奏している合唱ピアニストも存在している。斎木（2014）が、「合唱と一緒にピアノを弾くときに『アンサンブルを楽しむ』ためには、指揮や発声に合わせることに集中するより、息を合わせて一緒に歌うつもりで弾き、時には支えたりリードしたりという積極的なかわり方が望ましい（p.34）」と述べていることは興味深い。

2-3 合唱におけるピアノ伴奏の活用

ここでは、合唱におけるピアノ伴奏の活用について、合唱活動の場面に応じて論じていきたい。合唱コンクールや授業等、場面や求める合唱のレベルに応じて、ピアノ伴奏の活用方法も変わってくるためである。

(1) パート練習の譜読みにおけるピアノ活用

合唱の譜読みの際、ピアノに頼りすぎることへの懸念はあるものの、活用していることは間違いないだろう。

渡瀬（2013）は、「パート練習をする時でもなるべくピアノ等を使う（p.30）」ことを推奨している。本稿ではその是非について論じないが、学校現場でよく行われている「ピアノを良く聴いて」アンサンブルすること、すなわち「ピアノのピッチに声のピッチを合わせ」て歌うことに他ならない（p.30）。

また、清水（2014）は「合唱におけるピアノの重要性」を次のように述べている。（p.106）

練習では、合唱パートの譜読みを助けるために、しばしばピアノが用いられます。また、間違えやすい箇所などで、その「間違えそうな部分」を予測しつつ「正しい音」を示すという場面もあります。そうした「譜読みのピアノ」の技術も、「合唱のピアノパート」に要求される一面です。

清水が指摘するような「間違えそうな部分」を予測しつつ「正しい音」を示すには、パート練習をリードするリーダー等が事前に十分に準備をすること、合唱活動を行う集団の能力の正しい把握、楽譜を読む力量が求められるであろう。

さらに、学校現場の男声パートにおけるピアノ活用について、次の興味深い指摘がある。

竹内（2003）は、男声パートの譜読みにおいて「ソプラノになった気分で、輝いたトーンをめざしてみましよう」というキーワードを示した上で、次のように述べている。（p.81）

混声合唱の男声パートはヘ音譜表で書かれていますが、パート練習を生徒たちにまかせておくと実音でピアノを弾いていることがあります。
実音で弾いた場合、本来の自分の音域より1オクターヴ低く歌おうとする生徒が多く見られます。そうすることによって声に張りがなくなり、音色が暗くなったり重くなったりして、パートの音色統一という点からは好ましくありません。

変声期以前に同声合唱で女子と同じ声域を歌ってきた男子は、快適な声域が低くなっても、「男声パートを実音より1オクターヴ高く弾く」というこの方法に慣れてしまっているのであろう。変声期のどの段階で実音を聴いて歌えるようになれば良いのか、課題と言えよう。

学校現場においては、実際にパートの数ほどピアノを弾ける生徒がいけないことも珍しくない。しかも、「伴奏が仕上がるのは本番直前である。それまでは、どのみちCD等で練習するしかない。パート練習は音楽科の先生などをお願いして、メロディーを単音で弾いてもらい、それを録音させてもらうという方法（p.47）」をとるなど、工夫しているのが現状である（妹尾, 2015）。

(2) 合唱の演奏におけるピアノ伴奏の活用

まず、学校現場を中心として合唱におけるピアノ伴奏についてみていきたい。

①ピアノ伴奏者の選出と求められる力

当然であるが、まず「伴奏者と指揮者を選ぶ」段階から始まる。

「伴奏者に求められるもの」について、野本(2015)は次のように述べている。(pp.23-25)

伴奏者に求められるのは、指揮を見て音量やテンポを守ること。合唱を良く聴いてバランスよく弾くことです。自分のことだけに集中してしまうのではなく、協調性や視野の広さを持ったピアニストが望まれます。

テンポも音量も、ピアニストが先走っては合唱が台無しになってしまいます。ピアニストは、歌を聴いてから音を鳴らすくらいの余裕を持つことも大事です。

また、前奏や間奏のところでは自分の音楽を出すけれど、歌のところでは歌を支える役に回るというように、役割分担もこなせなくてはなりません。ステージ度胸も大事かもしれませんが、自信は練習でつけることができます。

その上で、野本(2015)はピアノ伴奏のポイントとして次の五つを挙げている。(p.97)

- ・強弱のさじ加減を上手に
- ・歌の音量とのバランスも考えて
- ・練習はテンポ、音量をキープして
- ・指揮をよく見て全体の音を聴く
- ・前奏、間奏、おかずはおいしく弾こう

次項では、選出されたピアノ伴奏者との関係の築き方について論じていく。

②ピアノ伴奏者に対する理解と協力

ピアノ伴奏者を選び、練習が開始されたら、「指揮者・ピアニストのよさや工夫を共有(p.33)」する必要があるだろう(石川, 2013)。石川(2013)は、「指揮者・ピアニストへの信頼関係を築く」ために、以下の項目を挙げている。(p.33)

- 一番苦勞しているのは指揮者・ピアニストであると心得よう。
- 指揮者・ピアニストの努力にスポットが当たるしかけをつくろう。
- 指揮者とピアニストの相互信頼を高めるしかけも大切です。

つまり、上記のような信頼関係を築いてはじめて「合唱の各パートがそれぞれの音の動きや表現と密接に関わり合っているように、合唱パート全体とピアノパートも、同じように関わり合って、ひとつの音楽作品を構成しています。そうした理由で、『ほかの合唱パートを弾く』ように、共演するパートの一部としてピアノパートにもよく耳を傾けて(p.106)」演奏することが可能になるのではないだろうか(清水, 2014)。

③合唱部や合唱団におけるピアノ伴奏の活用

一方で、合唱部や合唱団におけるピアノ伴奏は、より高度な技術が求められる。合唱ピアニストの齋木(2014)は、合唱のピアノ伴奏には、「多彩な音色」「的確なリズム」「空気を読む勘」の3点が求められると述べている。(p.34)

「多彩な音色」は、今どのような音が必要なのかを見極めることが大切である。楽譜を注意深く読み込み、作曲者が求める音をできるだけ忠実に再現することができれば、完成度の高い演奏ができる。また、歌詞を読んでイメージをふくらませることによって、ピアノパートだけを弾いても十分多彩な音を出したいという気持ちが生まれるはずである。

「的確なリズム」は、これはテンポを正確に刻むことだけではなく、曲の流れに沿った柔

軟なりズムが大切である。指揮者は手や体の動きでさまざまな指示を出す、ピアノはそれを表すため、合唱を自分のペースに巻き込んでしまう恐れがある。そのため、指揮者の意思を汲み取り、合唱をよく聴きながら、より曲の輪郭をはっきりさせるようにかけながらリードする働きが必要である。また、どんな速さの曲でもしっかり正確に同じテンポで進むことも必要であり、そのうえで、ビートをはっきり刻んだりゆったりと波のように動いたりするなど、ふさわしいリズムで演奏することが大切である。

「空気を読む勘」は、準備段階である第1、2点と異なり経験によるものであるため、ここでは割愛する。

3. 合唱におけるピアノ伴奏に関する意識調査とその結果

ここでは、合唱におけるピアノ伴奏に対する意識調査の対象と目的を述べた上で、8月30日に実施した調査結果についてまとめている。

3-1 調査の対象と目的

この意識調査における調査対象は、大学における共通教育「合唱表現Ⅱ・Ⅳ」の受講生である。

「合唱表現」は、1年生を対象とした共通教育の授業であり、クォーター制の授業である。「合唱表現Ⅰ・Ⅲ（クォーター1）」受講生の8割程度が、引き続き「合唱表現Ⅱ・Ⅳ（クォーター2）」の授業を受講する。授業の内容は、合唱曲の鑑賞（解説付き）、発声、パート練習、アンサンブルを毎回の授業で行い、数回で混声合唱曲1曲を仕上げていくという流れである。特に鑑賞において、アフリカの民族合唱やソビエト赤軍合唱団の男声合唱等の個性的な合唱、レパートリーはグレゴリオ聖歌から現代のポピュラーな合唱まで多岐にわたる合唱を映像つきで鑑賞することによって、学生の合唱に対する認識を広げることを目指している。今年度選曲した「ごびらっふの独白」は、ピアノ伴奏の存在を意識しながら合唱するにあたって、適切な曲だったと確信している。「ごびらっふの独白」のピアノ伴奏についての分析・考察は、「合唱におけるピアノ伴奏活用に関する研究（2）」を参照されたい。

本調査の詳細について、以下の表にまとめた。

【表2 合唱におけるピアノ伴奏の意識調査の詳細】

実施日程	7月30日（木） 合唱表現Ⅳの最終授業	8月30日（日） コンクールのステージを終えたバス車中
対 象	合唱表現Ⅳ受講学生56名 8月30日（日）のコンクールでステージに出演しなかった学生	合唱表現Ⅱ・Ⅳ受講学生80名 8月30日（日）のコンクールでステージに出演した学生
質問内容	合唱とピアノ伴奏は、どのような関係だと思えますか。また、合唱においてピアノ伴奏はどのような役割を果たしていると思えますか。	
目 的	合唱表現の授業を受講した学生が、ピアノ伴奏に対してどのような意識を持っているかを明らかにする。	

3-2 合唱におけるピアノ伴奏に対する意識調査結果

ここではページの関係上、8月30日に実施したクラスの自由記述をまとめる。

【表3 調査結果（8月30日調査分）】

○補助
<ul style="list-style-type: none"> ・歌の盛り上がりを助けてくれる。 ・合唱が主体で行われるため、ピアノは合唱の補助的役割を果たすと思います。 ・合唱がメイン。ピアノ伴奏はサポート。 ・合唱とピアノ伴奏は、歌をピアノがサポートする関係。 ・合唱を助ける役割。 ・アシスト。 ・合唱で伝えたいイメージの手伝いをしてくれる。 ・ピアノ伴奏が合唱を補助する。 ・合唱が主役で、ピアノはアシスト。 ・合唱の歌をよりよくするための引き立て役。 ・引き立て役。 ・ピアノ伴奏は合唱の引き立て役。あくまでも合唱がメインだと思います。 ・ピアノ伴奏があることによって、合唱の素晴らしさをさらに引き立てることができる。
○支え
<ul style="list-style-type: none"> ・声を支える。 ・合唱がメインでピアノ伴奏はそれを支える役割だと思う。 ・縁の下の力持ち。 ・ピアノ伴奏は、歌う者を支えている。 ・伴奏はいわゆる「伴奏」の意味合いの感じがした。 ・合唱がメインでピアノ伴奏はそれを支える役割だと思う。 ・ピアノ伴奏は、合唱の支えとなるものであると思う。 ・歌を支えている。 ・曲のベースをつくる。 ・歌っている人達のをせてくれる。 ・より歌をきれいに聞こえさせてくれる。 ・リズムを取りやすくする。 ・迷いそうになっても、伴奏を聞いたなら戻ってくるができる。 ・聞こえる形でリズムをとる。 ・リズムをとってくれる。 ・音でペースを確認できる。 ・リズム、必要。 ・リズムをとる。音程を合わせる。 ・ピアノ伴奏があると、歌いやすい。
○リード
<ul style="list-style-type: none"> ・主軸、必要。 ・曲をまとめる。 ・密接な関係、リード。 ・ピアノがないときは合唱の音程も不安になっていたの、合唱全体を引っ張っているのだと思う。 ・伴奏によって合唱をリードしてくれ、歌いやすくなった。 ・なくてはならない。ピアノあつての合唱。

○対等、共同

- ・支え合う関係。
- ・重なり合って、ハーモニーを奏でる。お互い様。
- ・相互で気持ちを高めあう関係。
- ・相補的な関係。
- ・合唱とピアノはリズムも息もピッタリでどちらが欠けても成り立たない。
- ・互いにぴったりとくっついている関係。
- ・ピアノが一つのパートみたいなかんじ。
- ・どちらも主張しすぎてはいけない。
- ・お互い支え合う。
- ・対等。
- ・お互いに良い影響を与えられる。
- ・お互いに調和し合う関係。
- ・歌を華やかにする。
- ・全体的な盛り上がりを作る。
- ・ピアノ伴奏は、伴奏というより、ソプラノ、アルトなどのようなひとつのパートだと思っている。
- ・信頼関係。
- ・共に音楽をする人。
- ・相互的。
- ・ハーモニー。
- ・相互補助。
- ・切り離せない関係。歌いやすくすると同時に音楽を進化させるもの。
- ・どちらかがどちらかに合わせるものでなく、お互いにさぐりあいつつ呼吸を合わせる関係。
- ・調和、まとまり。
- ・お互いを聞き合いながら、協力する関係。
- ・ピアノ伴奏と同じ歩幅で進む。
- ・相乗効果でより良い演奏が作り上げられる。
- ・ピアノが引っ張るところがあれば、ピアノが寄り添う部分もある。
- ・信頼、思いやり。
- ・持ちつ持たれつ。相互補助。
- ・どちらともが実力を拮抗させてないとかみあわない。
- ・良い意味で互いに依存している。
- ・合唱と伴奏が一つになっているのを感じた。
- ・相乗効果を生み出す。
- ・オムライスのご飯と卵。
- ・たいやきの皮（ピアノ）とあんこ（歌）の関係。
- ・兄弟。

○必要不可欠ではない

- ・なくてもよい。
- ・あくまで選択肢の一つで、無くても大丈夫なものなのかとも思いました。

4. 調査結果の分析と考察

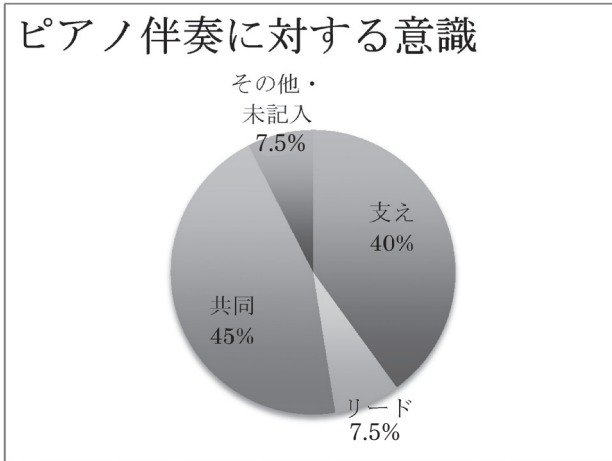
ここでは、表3に示した調査結果を分析した上で、考察を加えていく。

4-1 分析とまとめ

表3は、自由記述の内容によって大まかに分類してあるが、アンケートの分析にあたっては、

前述の丸山（1990）の提示した「Ⅰ支之型・Ⅱリード型・Ⅲ共同型」を使用する。

分析の結果、次のような割合となった。



- Ⅰ 支之型…32名（40%）
- Ⅱ リード型…6名（7.5%）
- Ⅲ 共同型…36名（45%）
- その他…2名（2.5%）
- 未記入…4名（5%）

【グラフ1 合唱におけるピアノ伴奏の意識調査結果】

この結果から、合唱におけるピアノ伴奏に関して、「共同型」という意識が最も高かったことは明らかである。そもそも、合唱において学生がピアノ伴奏の存在を含め、どのような役割を果たすか考えたことはなかっただろう。本調査に当たって彼らが経験した合唱曲「ごびらっふの独白」は、ピアノ伴奏の役割が大きい合唱曲であったことは否めない上、合唱コンクールのステージで演奏するまでには、指導者がピアノ伴奏と合唱の関係について言及した場面も少なからずあったことは事実である。また、調査を行った日程がコンクール当日の演奏終了後であったことから、ステージ演奏の印象が自由記述に与えた影響も大きかったかもしれない。

「支之型」は40%を占めたが、表3の調査結果の「補助」と「支え」をひとつにまとめることは、問題があったと感じている。「補助」は「伴奏」の語義に近いと解釈できるが、「支え」の捉え方は「共同」とも受け取れる内容が少なからず存在したからである。

また、練習の経過によってピアノ伴奏者の役割が変化していったことが予想される。練習の段階においてピアノ伴奏を演奏することは少なく、「トレーナーとしての役割」の方が強かった。ステージ演奏が近づくと「トレーナーとしての役割」からほとんど外れ、「合唱パートと、拮抗しながら音楽を作り上げる、『ピアノパート』としての独立した役割」を担っており、調査がこの時期に行われたことによる結果であることは受け止めたい。

4-2 考察

前述の通り、丸山の示したピアノ伴奏の型は、合唱曲の構成の側面から分類したものである。ピアノ伴奏に対する意識調査の自由記述を分析するにあたって、それぞれの型の用語を咀嚼すればするほど、学生の意識の記述についての解釈と照らし合わせる事が難しくなったことも確かである。

しかし、学生の合唱におけるピアノ伴奏に対する意識調査で「共同型」がもっとも多かったことは、特筆されるだろう。授業における実践を振り返ると、次のような影響が考えられる。

- (1) 選曲
- (2) ピアノ伴奏者の演奏レベル
- (3) ア・カペラや伴奏付き合唱曲の鑑賞・経験

- (4) 練習の進め方(パート練習におけるピアノやピアノ伴奏の活用、アンサンブルでの活用)
- (5) アンサンブルにおけるピアノと合唱の関係性に対する指導者のコメント

しかし、何よりも合唱におけるピアノ伴奏に対する意識に影響を与えるのは、それを実感できる演奏経験であることは言うまでもない。

おわりに

本稿は、合唱におけるピアノ伴奏の役割について論じた上で、意識調査をもとに大学生のピアノ伴奏に対する捉え方を明らかにした。しかし、楽曲構造に加え、合唱活動の場面を検討した視点を定めていなかったため、表面的な分析にとどまってしまった。自由記述という方法にも限界があったと思われる。また、的確な考察を行うためにも、より詳細な授業記録等が必要であった。今後は、このような課題を解決すべく調査方法を綿密に検討した上で、本稿で検討できなかったステージ演奏経験によるピアノ伴奏に対する意識の差を明らかにし、合唱とピアノ伴奏の関係についてその在り方や意識の変化についてさらに研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- 青島広志(2015)「合唱ピアニストとは!?!」『合唱コーラスまるかじり』中央公論新社
- 石川晋(2013)『音楽が苦手な先生にもできる!学級担任の合唱コンクール指導』明治図書
- 今井由恵(2014)「アンサンブルにおける音楽の創造—歌のピアノ伴奏に関する考察—」『北海道文教大学論集15』北海道文教大学
- 伊豆千栄美(1995)「ピアノ伴奏におけるバランスについて—シューベルトのアルペジオーネ・ソナタを中心に—」『九州女子大学紀要 人文・社会科学編32(1)』九州女子大学・九州女子短期大学
- 斎木ユリ(2014)「ピアノ:音楽というかけがえのない時間を楽しむために プロが教える!合唱指導 Part1 押さえておきたい合唱指導の基礎テクニック」『教育音楽[中学高校版] 3月号』音楽之友社
- 齋藤佳子(1998)「演奏家における伴奏ピアニストの位置づけに関する一考察—ジェラルド・ムーアの所説を中心として—」『武蔵野短期大学研究紀要12』武蔵野短期大学
- 佐藤陽三(1992)「第1回全日本中学校合唱コンクール全国大会 意外性一杯の好スタート」『Harmony79号』全日本合唱連盟
- 清水敬一(2014)「合唱におけるピアノの重要性」『必ず役立つ合唱の本 レベルアップ編』yamaha
- 妹尾克利(2015)「クラスの心が一つになる」『THE 合唱コンクール』明治図書
- 竹内秀男(2003)「ピアノによる男声パートの音取り」『イラストでみる合唱指導法 授業に生かせる指導法マニュアル110』教育出版
- 野本立人(2015)『必ず役立つ 学級担任のための合唱の本』yamaha
- 丸山繁雄(1990)「合唱に於けるピアノ伴奏の役割」『研究論文集38』佐賀大学教育学部
- 三浦洋一ら(1983)『新訂 合唱事典』音楽之友社
- 渡瀬昌治(2013)「ピアノを良く聴いてアンサンブルしよう」『部活でもっとステップアップ 合唱のコツ50』メイツ出版

¹作曲家の青島広志による造語である。